

九州香稻考

九州における近世代の稲作技術史（第8報）

嵐

嘉

一

(てん菜研究所支所)

香稻はカバシコ、ニオイ米、まれにはジャコウ米などと呼ばれ、とくに炊飯した場合に鼠尿臭に似た一種の特有の匂を発散させるのでこの名がある。本種は古来わが国各地で広く来客または祝い事用として僅少ずつながら栽培されて来たが、現在ではすでに全く過去の品種として忘れ去られようとしている。

最近、近藤、岡崎両氏によってその来歴、炊飯並びに澱粉の特性などについて発表されているが、著者もまたかねてから若干の資料を集めていたので、本報で九州地方に限定して、品種並びに栽培事情について述べておきたいと思う。

第1表 19世紀以前の香稻

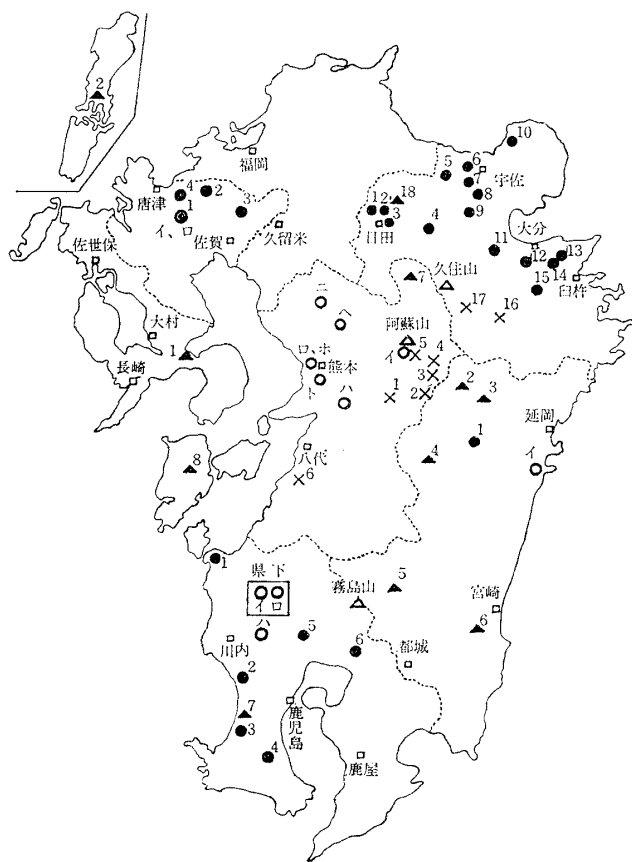
県別	品 種 名	第1図 番 号	産 地	引用 文献
佐賀	中 生：かばしこ	(イ)	厳木村	1805 ¹⁾
	〃 〃：かばしこもち	(ロ)	〃	1836
熊本	わ せ：かばしこわせ			
	なかて：打香子、香子			
	香子弥六		細川藩領	1735 ²⁾
	おくて：府内香子			
	も ち：香子餅			
本	野 稻：野香子			
	香子、香子餅	(ト)	川尻町	1735 ³⁾
	早 生：彦山かばしこ	(イ)	南 郷	
	中 生：かばしこ弥六	(ロ)	飽 田	1751 ⁴⁾
	打かばしこ	(ハ)	下 益 城	—63
宮崎	かばしこ	(ニ)	山 鹿	
	も ち：かばしこもち	(ホ)	飽 田	
	カバシコ	(ヘ)	七 城 村	1877 ⁵⁾ —86
宮崎	佐伯稻	(イ)	富 高 村	1838 ⁶⁾
鹿児島	中 生：香子	(イ)		
	晩 生：香寄(?)	(ロ)		1804 ⁷⁾
	かばし	(ハ)	入 来 村	1862 ⁸⁾

昭和43年1月27日 第39回講演会で発表

九州における香稻の分布 文献による19世紀以前の状況を第1表に、20世紀におけるそれを第2, 7表に示し、両者を併せて第1図にスポットした。

まず19世紀以前の状況を見ると、本種の栽培は平坦部でもかなり広地域にまたがって行なわれた。梗が多いが糯も若干認められ、陸稻にも僅かながら存在した。熟期は早晩にわたるが中生が最も多く、第3表のように、収量は一般品種に比しかなり低かった。成形図説⁷⁾の中に

第1図 九州における香稻の分布



(備考)

○イ、ロ……19世紀以前に認められたもの

●1、2……20世紀に認められたもの、各県在来種
特性調査による

×1、2……同上、奥村、本田、著者による材料

▲1、2……同上、九大農場保存材料

第2表 20世紀に見出された香稻

調査者	県別	品種数 梗 糯	(第1図 番号)	取寄先又は現物確認地〔品種名〕
九大農場 保存材料 (1963~65取寄)	長崎	3 0	(1)森山〔愛林〕 (2)豊玉 (3)県下	
	熊本	3 0	(7)小国 (8)天草 (9)県下	
	大分	1 0	(18)山国	
	宮崎	8 2	(2)高千穂〔ユノヒラほか1品種〕 (3)日ノ影〔大川早生〕 (4)椎葉 (5)小林 (6)清武 (7、8)県下	
	鹿児島	5 0	(7)吹上〔メラゴメほか4品種〕—メラゴメは印度型稻	
計		20 2		
奥村(1917)	熊本	2	(1)矢部 (2)馬見原	
本田—	〃	4	(3)柏 (4)草部 (5)高森 (6)吉尾	
奥村(1917)	大分	1	(17)久住	
著者(1933)	〃	2	(16)緒方 (17)久住	

(備考) 品種名中香稻又はかばしと呼ばれるものは名を記載しない。

は中稻の項に「其中ニ香子ハ芒ナク粒円シ稈米共ニ白シ
飯ニ炊キテ馨ク其稈ハ衆茎ヨリ勝レタリ然レドモ収実甚

第3表 香稻の収量

場所	年次	品種別	収量
肥前 ¹⁾	1805	かばしこ	1.10升/坪
		他品種7点	1.57
松浦郡	1836	かばしこもち	0.85 〃
		他品種20点	1.65
薩摩 ⁸⁾ 入来村	1862	かばし	0.70石/反
		加世田万石5点	0.96

(備考) 収量：肥前粳、薩摩玄米

第4表 大分県における香稻作付状況¹⁰⁾
(大正11年)

郡別	面積 町	町村数	品種数
1 西国東	0.8	3	6
2 東国東	6.6	5	3
3 速見	9.7	8	6
4 大分	105.7	11	23
5 北海部	2.2	4	3
6 南海部	144.5	14	4
7 大野	55.2	17	39
8 直入	59.5	14	10
9 玖珠	39.3	7	37
10 日田	6.8	8	13
11 下毛	19.6	13	12
12 宇佐	179.6	19	12
計	629.4	123	168

少ナキヲ以テ多ク作ラズ只稔盛(マツリモノ)ニ供フコ
トアリ」と簡潔に要点を述べている。阿蘇から大分県に
かけてはかなり後期まで恐らく最も周密な分布が見られ
たようで、近藤⁹⁾によると、慶応3年松山藩士の薩摩へ
の旅日記に大分県佐伯から阿蘇内牧を過ぎる間に毎日ニ
オイ米を出されたことが書かれているそうである。

20世紀に入ると、香稻は平坦部からはほとんど姿を消
し山間(一部は中山間)地方に残存を見たようである。
とくに大分県では米穀検査の上から大正期に問題とされ
その駆逐策がとられた。香稻がこのような産米改善上と
くに問題となったのは九州では大分県が主であった処を
見ると、当時同県での香米分布が他県より多かったのだ
はなかろうか。大分穀検の大正11年の調査¹⁰⁾によると、
香稻の分布は第4表のようで、栽培面積は全県で約630
町、栽培町村数は123におよんでいた。1戸当りの栽培
は平均1.6(郡により0.8~2.4)反で、反収1.7石で、
生産量の87%が自家消費となっていた。なお、同調査に
は香稻品種が141種掲げているが、異名同種などの点を
別として当時普通品種中に混入していた場合がかなり多
く、その場合普通品種名をそのまま香稻品種としてあげ
ているものが含まれている。今、このような品種を(A)と
し、真の香稻と認められるものを(B)として当時の主要品
種の分布を示せば第5表のようである。(A)の中には過去
の品種または在来種の多いのが眼につくことから香米は
かかる品種に混入が多かったのであろう。

鹿児島県では明治44年ごろの「主要作物耕種要綱」中
にかばしこが早生種として掲げられ比較的栽培が多かつ
たことを思わせる。

香稻品種の特徴 第7表第2図に示す佐賀、大分、宮

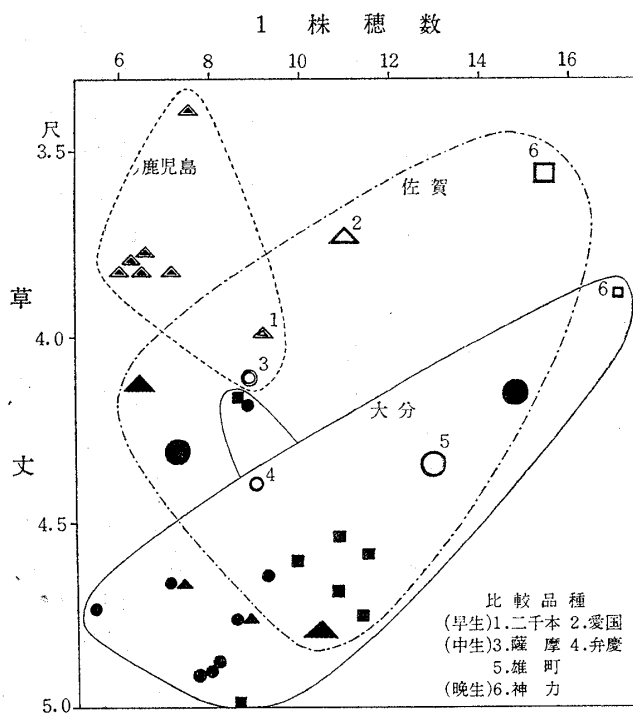
第5表 大分県における主要香稻品種の分布¹⁰⁾

郡 別	(A)												(B)								
	北 国	駒 掛	目 赤	大 阪 不 動	借 銭 切	江 戸 錦	赤 弁 慶	目 黒	惣 五 郎	青 撰	赤 坊 主	倉 建	黒 毛	金 五 郎	カ バ シ コ	臭 糯	香 坊 主	香 早 稲	赤* 鎗	佐* 伯 稲	湯* 平 坊 主
1			○																		
2																					
3															○						
4	○			?	○				○		○									○	
5																	○				
6	○				○																
7	○				○		○			○		○			○			○		○	
8					○			○	○				○	○	○						
9						○		○							○			○			
10																			○		○
11			○			○									○	○			○		
12		○	○																		
計(町)	145	62	49	28	22	20	19	19	17	16	14	12	12	11	7	0.4	0.8	0.3	0.0	1.8	2.4

(備考) (A) 香稻を混入した普通品種と推定

(B) 本来の香稻品種と認められるもの (*印は著者の推定)

第2図 香稻品種の特性の1端 (第7表による)



(備考) 黒印：香稻品種、白印：奨励品種

△ 早生、○ 中生、□ 晩生

崎、鹿児島の品種特性調査結果（比較のため当時の奨励または有力普通品種の成績をも併記）と著者の過去の見聞とから概観すると、香稻は早中生の品種が多いが、大

分、宮崎などには晩生のものもいくつかあった。糯品種も僅か認められる。草丈または稈長は高いものがほとんどすべてで、穂重が大で、穂数は普通種よりも少ない。晩生のものは穂数がやや増加しているが、神力などにははるかにおよばない。鹿児島県の香稻は当時の中生穂重型普通種薩摩に比べるとむしろ早生で稈長、穂数ともいくらか劣っていた。芒については有芒種が約70%でその中多長芒のものが25%あった。稈先、芒、護穎に着色したものがほとんど全部であった。粒については、外見上の品質評価では普通種より劣り「下」に属するものが多く、粒大は当時の穂重型大粒種を基準とすれば同大のものが僅かでそれよりやや小粒のものの方が著しく多いが、粒形に丸味があった。玄米収量は第6表のように、集約栽培条件下では普通種に比べ著しく低い。実際には1農家では条件のわるい田に栽培されることが多かったので実収はさらに低くなっている。

第6表 香稻の反当り収量 (大分農試¹²⁾、大正2～5年平均)

品種別	玄 米 収 量 (反当り石)					計
	2.0	2.4	2.8	3.2	3.6	
香 稻	1	1	6	6	3	17
普通稻			1*	1	1**	3

(備考) *雄町、**神力

第 7 表 九州各県の在来種特性調査に現われた香稻とその特性

県別	品 種 名	出穂期	成熟期	草丈	一穂株数	一粒(穂長)穂数	芒	着 色	粒 大	品 質	取寄先(村名)	第 1 番 図号
		月日	月日	尺				稈 先 護 穎				
佐賀 1915	香 坊 主	8.31	10. 7	4.13	6.4	178	ム	暗 褐	濃赤褐	中	下	七 山 (2)
	臭 坊 主	9. 1	10. 8	4.31	7.2	176	少	"	淡 褐	大	中	背 振 (3)
	カバシコ糯	8.28	10. 4	4.80	10.4	205	稀	濃赤褐	濃赤褐	中	下	敵 木 (1)
	香 稻 糯	9. 5	10.10	4.16	14.6	175	少	赤 褐	赤 褐	中	下	玉 島 (4)
	(比)愛 国	8.17	9.29	3.73	11.0	166	中	暗 褐	褐	大	中	
	(比)雄 町	9. 4	10.18	4.35	13.0	176	少	ム	ム	大	上中	
	(比)神 力	9. 7	10.22	3.56	15.4	112	ム	ム	ム	大	中	
大分 1916	赤 鎗 3 号	8.27	10. 1	4.76	8.8	206	全芒・長	紫 褐	一	22.5	上	東有田 (2)
	桜 町	8.30	10. 3	4.67	7.4	194	"	"	淡 紫	"	下	白 野 (10)
	香 稻 3 号	9. 2	10. 3	4.66	7.1	271	ム	"	濃 紅	24.7	下	阿 南 (11)
	玖 珠 坊 主	9. 6	10. 4	4.74	5.4	208	ム	淡紫褐	淡 紅	"	下	森 町 (4)
	愛 若	9. 6	10. 5	4.17	8.8	—	ム	"	"	23.2	中	糸 口 (6)
	赤 鎗 2 号	9. 6	10.21	4.76	8.6	198	少中	紫 褐	"	24.7	下	三 花 (1)
	大 ¹²⁾ 香 稻 1 号	9. 6	10.21	4.91	7.8	154	多長	"	"	26.2	下	山 口 (5)
	" 4 号	9. 6	10.21	4.88	8.1	176	少長	"	"	24.7	中	丹 生 (13)
	" 5号(?)	9. 4	10.26	4.65	9.3	170	ム	一	一	25.5	中	安心院 (8)
	" 2 号	9. 8	10.21	4.85	8.0	178	少中	紫 褐	淡 紅	26.2	中	豊 川 (7)
	赤 鎗 1 号	9. 9	10.21	4.99	8.7	158	多長	"	"	22.5	中	馬 原 (3)
	順 神 力	9. 9	10.25	4.16	8.7	158	ム	淡紫褐	"	26.2	下	川 添 (14)
	分 合 川 坊 主	9. 8	10.28	4.61	9.9	178	ム	"	"	25.5	下	豊 川 (7)
	佐 伯 稻	9.13	10.28	4.76	11.3	127	少長	紫 褐	"	22.5	下	東植田 (12)
	中 俗 2 号	9.15	10.25	4.59	11.5	119	少短	淡紫褐	"	25.5	下	南院内 (9)
	" 1 号	9.15	11. 4	4.69	10.8	135	少中	"	"	24.0	中	" (9)
	玉 錦(糯)	9.13	10.31	4.54	10.9	123	ム	一	一	21.7	中	—
宮崎 1928	(比)弁 慶	9. 6	10.17	4.40	9.0	151	ム	ム	ム	25.5	中	
	(比)雄 町	9. 6	10.28	4.00?	8.5	181	多長	"	"	26.2	中	
	(比)神 力	9. 9	11. 3	3.90	17.0	129	ム	"	"	24.7	中	
鹿兒島 1929	宮 ¹³⁾ カバシコ糯	9. 1	10.14	3.72	9.7	118	少	紫 褐	紫 褐	20.0	下	諸 塚 (1)
	(比)白 玉	8.24	10.10	4.29	7.0	153	ム	ム	ム	24.0	中	
	崎 (比)相 徳	8.28	10.15	3.58	9.7	110	"	"	"	24.8	中	
	カバシコ	—	9.27	3.78	6.6	7.3(寸)	一	一	一	一	一	山 田 (5)
	香 稻	—	9.28	3.80	6.2	7.8	多長	有 色			下上	知 覧 (4)
	千 代 香	—	9.28	3.83	7.1	7.5	多短	"			下中	東市来 (2)
	兄 チ ヨ ゲ	—	9.28	3.83	5.9	7.3	多長	"			下下	田布施 (3)
	ハバシコ	—	9.28	3.39	7.5	7.3	少長	"			中上	清 水 (6)
	カバチカ	—	9.30	3.83	6.4	7.7	多長	"			下中	三 笠 (1)
	(比)二千本	—	10. 1	4.00	9.2	7.1	ム	淡			中上	
1929	(比)薩 摩	—	10. 1	4.11	8.9	7.6	少短	ム			中上	

要するに、香稻は早中生、高稈穂重型で穀部に着色があり、有芒なものが多く、品質は概して不良でやや丸粒、著しく低収性のものであったと考えられる。これらの諸特徴はいずれもかなり古い時代の品種のそれをよく現わしていると思う。香稻はきわめて古くから1戸当では僅かしか栽培されなかったで、その間に恐らく普通米のような品種改良がなされたとは考えられず、従ってこのように古い稲の特徴の名残りとどめているのであろう。われわれは逆に香稻の姿から昔の稲の品種の特徴を偲び得るのではあるまいか。

九大農場保存材料リストにつきご教示に預った永松教授、石川文雄氏に深謝の意を表する。

引用文献

- 1) 早川孝太郎(1950): 佐賀県の稲作坪刈帳.
- 2) 肥後国之内熊本領産物帳(1735): 永青文庫.

- 3) 河尻町江持出従前之商売仕来候産物品々之差出(1735): 永青文庫.
- 4) 細川重賢(1751~63): 雑事紛冗解, 下.
- 5) 中島源十郎(1841~87): 大福帳.
- 6) 宮崎県臼杵郡七ヶ村明細(1838).
- 7) 曾繁, 白尾, 国柱(1804): 成形成説.
- 8) 入来院直記(1862): 当成毛五穀類出来取納帳, 入来町史.
- 9) 近藤日出男(1967): 農業, 988号.
- 10) 大分県穀物検査所(1922): 香米品種一覧.
- 11) 佐賀農試(1915): 佐賀県主要稲品種特性調査.
- 12) 大分農講(1917): 大正5年度事業報告第8号.
- 13) 宮崎農試(1928): 水稻品種調査.
- 14) 鹿児島農試(1929): 県下在来種特性調査, 同農試成績総要覧.
- 15) 豊後国之内熊本領産物帳(1735): 永青文庫.

追記 19世紀以前における香稻の記載は大分県においても「かばしこ(おくて)」として見られている¹⁵⁾。